

国語の花咲く国へ

辻 昭三

せせらぎ出版



国語の花咲く国へ

辻 昭三

せせらぎ出版

国語の花咲く国へ

はじめに

ある国が、未来の盛運を託し、新しい活力を求めるのは、いつの時代も、次に育つ若い世代である。現世代は次の時代を支える力が育つのを期待し、未来を切り開いてゆく新しい活力を待ち望む。

しかし、次の世代がその期待に^{こた}えてくれるのは、残念ながらこの若い世代が受ける教育と、育つ教育環境が、現世代よりさらに充実し、優れている^{ばあい}場合のことであつて、その逆も現実には起る。それは古今東西を問わず起つてきたし、また今後も起り得ることだ。もちろんそれは一国の衰退の始まりである。

したがって、現世代が与え得る教育力が、その国の盛衰、その社会の未来の希望の有無^{うむ}を分ける最重要ポイントとなることは申すまでもないことも知れない。

今から七十年ばかり前までには、当時の世界的パワーの一角を占めるに至り、自信にみちて振舞っていた日本は、その勢力を次第に伸ばしていた。

だが、出る杭は打たれるという諺^{ことわざ}もある通り、思えば当然の成り行きだったかも知れないが、これが英米など既存の列強にとつて、目障^{ざわり}になつていったのだ。当時の彼らの側からみれば、非白人で異教徒^{ペイガン}、異文化の成り上り者めというわけである。ことに当時のアメリカでは、今からみれば想像し難いこともかも知れないが、非情苛烈な独裁者スターリンの専制ソ連に、意外にも好意を持ったり、アジア内部の諸事情には疎かつたりした人物、フランクリン・ルーズベルトの率いるワシントンの目にはそう映っていた。

挙げくの果てに、日本は対米英戦に踏み込んでしまふ。当時の国の総力をあげて戦つたが完敗し、数年にわたり占領支配される。個人に例えれば、完全にノックアウトされ、重傷を負つて、一時は手足を縛られ、呻吟するほかになつたわけである。ごく大雑把に言えば、二十世紀前半の日本の為体はそのようなことになる。

つまり、この前の大戦は、乾坤一擲の日本の総力を尽しての奮闘が、アジアをはじめ、世界史を大きく変えたが、同時に日本そのものも三千年に及ぶ長い自国の歴史の中で、経験したことのない深傷を負つて、大きく変らざるを得なかつたのである。もちろん、勝者アメリカの方は、ご承知のように世界的パワーとして君臨するに至つたわけだ。

しかし、こうした敗者としての受苦や大変動を克服し、それを乗り越えて、やはり父祖の努力を無にすることなく、誇るに足る先進国として生きてゆか

ねばならない、この国の運命に思いを致すとき、その運命を握っているのは、言うまでもなく、逆境から立ち上って生きる若い力であり、その力を生み出すべき教育である。

だが、それはどういう道をたどり、どうなっているのだろうか。これから暫しばらく、この面を中心にして、昨今の状況を注意深く観察し、考えてみることにしたい。一国の運命にとって、これほど重大な問題は他にないからである。

古来、一民族の興亡には、政治、経済力、科学技術の水準など、いろいろな面、さまざまな力が関わってくるが、それらを生み出す核となり、根源の力となってきたのは、常にその民族の心の目覚めと、知的活力の力強い脈動であり、それは言霊ことたまの幸さきうところから、はじめて湧き出るものであった。

目次

はじめに

2

第一章 危機にあるレヴェル・ダウンの国語教育

13

洋画のタイトル今昔こんじやく

占領軍の知力低下策とその優等生・文部省
国語力低下と心の貧困化

「もののあはれ」は遠くになりにつけり
先進諸国に逆行する異常な教育

第二章 唱歌 —— 心の宝・国の花

49

詩歌の伝統の幸せしあわせ

踏み潰される心の故郷と創造の芽
去年こぞの雪いまいずこ

父祖の宝、継承の責務

第三章 文は人なり・文体は世の鏡なり

95

父祖の心を学び知る

バラの花咲くエメラルドの島の悲劇

十五人の赤い血と蘇る不屈の魂

国語文体の骨格は漢文の素養にあり

第四章 誇りの喪失と腐敗の相貌

125

浮かび上がる卑賤化世代の絵姿

反面教師ロドヴィーコ・スフォルツァ

第五章 読書・それは心の世界の耕作である

139

読書量の激減と心の荒廃

われわれはホモ・ロクエンスである

第六章 国語教育とわれわれの未来

『国語』の量と質のお粗末さ
レヴェル・ダウン進行の果てと
最重要課題

157

第七章 教育の再構築のために

近衛文磨と東條英機
ステッセルとヴィツテ
真珠湾奇襲は最良策？
突っ走る単眼思考の日本社会
雁字搦めの教育システム
発想の完全な転換
教育再構築・実践編
文化の断絶を謀る教育は教育に非ず

179

あとがき

222

危機にあるレヴェル・ダウンの国語教育

洋画のタイトル今昔こんじゃく

戦前の洋画を想い出してみると、近頃入ってくるアメリカの映画などと違って、実にしゃれた、気の利いたタイトルが付けられていた。

例えば、フランス映画 *La Part de L'Ombre* (「陰の部分」) は『しのび泣き』、イギリス映画 *Brief Encounter* (「束つかの間の出会い」) は『逢あいびき』といった具合である。『陰の部分』では、観客は恐らく集らず、先ず短命に

終ったところだろう。『しのび泣き』に惹かれて人々が集まったのだ。

少し前のことになるが、イギリスを舞台とした映画で、中世ヨーロッパでは一世を風靡したアーサー王物語の中の、騎士ランスロットと王妃ギネヴィアの恋を扱ったものが上映された。王の眼を盗んでの危険な恋が、かなりうまく描かれていたが、そのタイトルは『トゥルー・ナイト』だった。それが何のことだか、一般には理解されず、「何の夜の話なんだろう」などといって、殆んど人々の興味を惹かずに終わってしまった。英語の True Knight をそのままカナ書きにしただけの芸の無さである（原題名は First Knight）。日本語のタイトルにするなら『不倫の王妃』とか『道ならぬ恋』ぐらいにすれば、いまし注目されただろうに。

「芸の無さ」に対しては、もちろん反論があるだろう。カナにした方が恰好いいじゃないか。それが若い人に受けるんだよと。いや、若い人だけじゃな

いだろう。小学校から英語を教えろという時代なんだと。筆者などは、英語のカナ書きと英語そのものとは、いささか違うのではないかと思っているが、なるほど世の中、今やカタカナ語の洪水である。ちよつと街を歩いてみても店の名や看板からしてもそうだし、走っている車の横や後ろについている会社名なども横文字だし、耳に入ってくる会話にもカタカナ語がしきりに飛び出してくる。「君、あの時は右サイドじゃなくて両サイドだったよ」とか「あの店、オープンしてるかな」「これ、安くゲットしたぜ」なんて具合である。

もちろん、これらのカナ語には、それぞれ使われず悲しんでいるだろう日本語、それも口にし易い、口に乘せれば快い日本の言葉がある。日常会話ばかりではなく、スポーツや会議、講演とかシンポジウムなどでもカナ語は氾濫しているし、クラスとかカード、カメラなど、もう日本語化したと言って

いいものも沢山ある。

しかし会社名などになると、ここまで横文字にしなければならないのかと首を傾げ^{かし}たくなるのもある。車に書かれたローマ字とか横文字などになると、恰好いいとか、美しいなどより、漢字より読みづらいし、インパクトが弱い。MITSUKOSHI つか DAIMARU なづな 「三越」、「大丸」を比べれば、すぐ判ることだが、表音文字語と表意文字語では訴える力と速度が違う。筆者など横文字を読むのを専門にしている者でも、例えば書店に並んだ書物のタイトルにざっと目を移してゆく場合、英語の場合などは、完全な表音の綴りではなく site ㄅ sight や night ㄅ knight なづな、半ば形象化していて、一瞬で識別できるにしても、やはり視線を移して文字を辿らなければならない。これに対し表意文字の漢字の場合は、憶えるのに少し時間はかかるだろうが（英単語のスペルの方が努力を要すると思われるが）、頭に入ってしまうえば、

出合った時、一瞬で識別できるといふ誠まことにありがたいものである。

これは複雑な絵や、人の顔が一瞬で判別できると同様で、その読み取りのためのスピードとエネルギーには格段の差がある。だが実情はカタカナ語とローマ字の流行は止むことがない。

進化論の『種の起原』で有名なチャールズ・ダーウィンはケンブリッジ大
学を出るとすぐ、選ばれて、当時イギリス海軍の測量船だったビーグル号に
乗り込むことになる。因ちなみにこの船は、日本と不思議な縁があつて、後に薩
摩藩が購入して「乾行」と名づける。それがさらに維新後、明治新政府に献
上され、日本海軍の船になっている。それはさておき、若き日のダーウィンは
一八三一年から五年ばかり、この船で南米から南半球を周航する。その航
海の旅で観察し、収集した資料と体験が後の進化論を導くことになったこと
はよく知られている。

彼の進化論の着想で有名なガラパゴス諸島の踏査を終ったビーグル号はポリネシアの島々を訪れることになったが、ダーウィンはタヒチの原住民に非常に好感を抱いたようだ。彼には未開で不潔で好戦的に思われたニュージーランドのマオリ族と違って、彼らの穏やかで人が好く、その「文明化」を示すもの腰や振舞い、明るい雰囲気が高く評価している。だが彼らの刺青いれずみだけは感心できなかった。時の流行で一旦刻んでしまった刺青は、流行が変つても、どうすることもできない醜い模様として無惨に残るというわけだ。頭頂だけを剃るタヒチの習慣なども見苦しい代物だが、これが流行ですと答えられれば、何とも致し方ないかとも述べている。

カタカナ語やローマ字がやたらに登場するのもこれが流行だ、時代の流れだと言われれば、ダーウィンに限らず、やはり、ハイ、そうですか、と退き下がりざるを得ないのかも知れない。だが流行では片付けることのできない

理由があるのではないかと筆者などは考えている。

その一つは後で詳述したいが、小・中・高での国語教育の時間、分野、質のどれを取っても、次第に減らされ、低く抑えられ、日本文化の豊かな伝統から切り離され、先人が営々として積み上げてきた古典との断絶が謀^はかれてきたことがある。

占領軍の知力低下策とその優等生・文部省

敗戦と占領軍の政策により、国語教育が減少低下させられたが、ことはそれだけではない。時が経つにつれ、本来なら、敗戦と被占領によって受けた打撃から立ち直るべく力を尽すべきところだろう。事實は逆で、教育政策は、成長期の知的活力の伸びを抑え、ひたすら落伍者の出ないよう、もっぱら安全運転の方に顔を向け、次々と教育課程の変改を試みたのである。進学競争、

格差の存在などはすべて悪であり、民主主義の世にそぐわないものとされてきた。

だが言語教育というものは、その国の人々の心の在り方、アイデンティティーの確立、先人の伝える文化の受容に深く関わってくる。国語教育とは、その民族の心の教育そのものである。人々の心を深く耕やすこと、それが国語教育の果すべき役割なのだ。

洋画のタイトルの最近の芸の無さということに、先に触れたが、芸の無さとか、時代の流行というより、その背後にあるのは、結局、国語力の低下現象の存在だと言って間違いはないだろう。粋いきなタイトルを考えようにも、その力を失ってきているわけで、これは映画の題名だけで済む問題ではないだろう。

明治初期の人々が、哲学、化学、権利、主義、質量、主観、客観、心理、

組織など次々と訳語を独創し、日本語を新しい時代に適応させ、新しい生活様式を身近なものにし、思考力を鍛え、豊かにしていった、あの力が失われてきたのだと言っても過言ではないだろう。学制が整えられ、確立されて、一斉教育が行きわたるにつれ、個々人の知力の伸びが、ある程度平準化へ進んだということもあるかも知れない。

しかし占領軍による戦後の教育政策の場合は、そういった、あるいは認められるかも知れない緩やかな下降といったものではなかった。

一九四五年八月の第二次大戦の敗戦により、日本は以後六年余、マッカーサー元帥を最高司令官とする占領軍によって、政治から庶民の生活万端に至るまですべての面で支配されることになる。この占領政策の基本目標は、ごく判り易くいえば、日本人を二度とアメリカに刃向うことのない民族に改造すること。いわば牙を抜き、骨抜きにすること。つまり危険と思われる精神

の型を潰し、知的活力を殺ぐことだったといっているだろう。占領軍の政策として、これは至極尤もな、賢明な策だったろうが、強敵となつた日本人を先ず御し易い民族に改造する必要があつたのだ。これは筆者が調べたわけでもなく、俗説だろうと思うが、最高司令部はNHKに巧妙に示唆し指導して、日本人の関心を歌とスポーツ観戦に向け、また民間を誘導してストリップ劇場などを教え、流行させ、日本人が歌とスポーツ観戦とセックスの享樂に耽るように操作していったということである。

それはともかく、日本人の精神改造のための教育改革が推し進められ、小学校から帝国大学に至るすべての段階の教育を、この目的に合うよう改革の手がつけられたのである。

先ず国語教科書から、戦争とか軍国主義的色彩を帯びた箇所はもちろん、ナショナリズム、愛国心、神道的な思想等の“危険な”面をすべて抹殺する

ことから始められたのだ。国民学校（戦前や今の小学校に相当）では国語の授業は文章を勉強することではなく、先ず第一に墨^{すみ}でその危険な箇所を消す作業をすることから始まった。

例えば素戔^{すさのお}鳴尊^{みこと}が奇稲田^{くしいな}姫^{だひめ}を助けるために八岐大蛇^{やまたのおろち}を退治する物語（低学年）とか、源義経^{みなもとのよしつね}が壇浦^{だんのうら}の合戦で弓を海に落す。その弓が叔父^{たふ}為朝^{ためとも}の弓のような強弓でないため、もし敵に拾われたなら、総大将の弓として恥になると思い、義経^がが敵前で危険を冒^{おか}して波に漂う弓を拾い上げる（高学年）といった物語は「退治」とか「征伐」「武器」などの言葉が含まれるのですべて平和の民たるべき日本人の学ぶべきものではない「ご法度^{はつと}」項目としてせつせと消してゆくわけである。こんな次第で国語教科書はみるみるページ数が減って薄っぺらなものになっていったのだ。

その後本来の国語の勉強に入ることになるが、これに見合うように国語の

週時間数も減らされたのは自然の成り行きだったとも言えるだろう。こうして週六時間の国語は四時間となったが、考えてみれば修身の授業というのは偉人のエピソードや物語を集めたもので、国語の補強のような役割をしていたから、それを含めると国語は週七時間から四時間になったことになるだろう。中学では国語三時間、漢文二時間の計五時間が四時間に減ったが（小学校ではさらに習字が一時間あったように思う）、それとともに国民学校五年生から導入されていた文語文は現代生活には不必要。敬語表現は民主主義の世には相応^{ふさわ}しくないから削除。漢文は中学で入門程度の導入で充分として削減され、国語学習のレヴェル・ダウンと過去の文化との断絶^{はか}が謀^{はか}られていったのである。

さらにその後こともあろうに、自国の当局自らの手で意図的な下降が回を重ねて図られてきたのだ。そうした教育政策がこの国の現状と未来に及ぼす

影響と、そこに現出するであろう結果については、重大なものありと考えられても何の不思議もないし、むしろ否定する方が異常だと言わねばならないのではないか。

だが困ったことというか、残念なことに教育の場合は他の分野のように、政策の結果が直ちに誰の目にも明らかに認められ、見抜かれ、指摘されるようなものではない。例えば厚生医療とか薬剤とか、食品とか、自動車や航空機の欠陥とか、不良品といった場合は、結果は直ちに、あるいは直ちにではないにしてもやがて現われ、露見し、対策がとられたり、改善、改良が加えられ、責任者も明らかになる。

ところが教育の場合は、ことはそう簡単ではない。何しろ結果が出るのは十年、いや二十年も先のことになるだろう。国民の誰の目にも明白になるには、さらに三、四十年という年月がかかってしまう。その頃にはもちろん、

当の責任者は何代も替つてしまつてゐる。あるいはもうこの世にはいないかも知れないというまことに厄介な分野である。しかも、例えば厚生医療とか薬剤のミスや失敗、車などの製品のミス、食品の欠陥などの場合ならその及ぼす影響あるいは被害状況なども限られており、対策も立て易く、改善の間も比較的短期間で済む。経済、財政の失敗にしてもまだ恢復ややり直し、あるいは対策の模索も、時間さえある程度与えられれば可能である。だが教育方針や政策の失敗となると以上あげた分野とは全く異なる。全国民の生活のあらゆる分野、国力のあらゆる面、いやその国の浮沈興亡に関わってくる。一国、一民族の生存の活力の育成に関わつてゐるのだ。

このようにその国と国民にとり、これほど重大な影響を齎す分野でありながら、いまあげた性質上、例えば政治の争点にはなりにくい。しかしこの分野こそ、失敗の許されない最も大切な分野であり、本来は国家の総力を挙げ

て取り組まなければならない問題なのだ。一国の最も高い識見と叡知を結集し、広い視野と展望をもって当らなければならないものだろう。

しかし現実には、政府の組閣の場合でも、残念ながらこうした認識は薄いように、文科省の大臣となると、大抵まあ無難な人物を当てておこうといったことになっている。列国に伍して一国が生き抜くためには、ここにこそ洞察力、識見、実力とも最高の智者を当てなければならぬし、当局は最も鋭敏な感知力を備えたアンテナを張りめぐらせて、注意を怠らず、好ましくない兆候の現われ次第、直ちに必要な対策を大胆に講じなければならないはずである。

医療ミスや薬剤事故、あるいは欠陥食品や悪徳事業操作の露見などで、テレビの前で社長以下が深々と頭を下げてみせる光景を、しばしば拝見する世の中になってきたが、教育というこの分野では、残念だがこうはいかない。

洞察力のある一部の鋭い識者が指摘しても、都合のよい資料を出してきて、追及をかわす。他の分野のように「物的証拠」がない。決め手を欠いて、何となく済んでしまう。

しかし繰り返すが、国際場裡を生き抜かねばならないその国にとって、ことは国民生活のすべての面、国家の命運に関わってくる、この分野では、いかに困難があろうとも、事態を私心なく、偏りのない眼で見極め、問題を正視して、大胆に、賢明な対策を練り、実行に移す努力を欠いては、明るい未来の展望はないのではないか。一国の興隆ではなく、衰亡と国民生活の低下が待っていると考えるべきではないのだろうか。

国語力低下と心の貧困化

その昔、旧制の高等学校や専門学校では、数多くの寮歌や逍遙歌が創作さ

れ、歌い継がれて、新入生は先ずそれを覚えさせられたものである。ところでそれらの歌を作ったのは、大抵の場合、今で言えば高校三年生か、大学一、二年の人たちだった。例えば次のようなものがある。

ああ幽冥の霧はれて 潮騒しおざいさゆる北の海
波路遥なみじはるかに永却の 啓示さとしの星にあくがるる

われは湖うみの子さすらいの 旅にしあればしみじみと
昇る狭霧さざりやささなみの 志賀の都よいざさらば

宇宙の真理まことにあくがれて 創造たくみの神壇うてなにひざまずく
若人わこうどよ行けオリーブの 光漂ただよう海わけて

右の三校のもののどれをとつても、青春の日の若い血とリリズムやロマンの情感とともに、成熟へと向う知性が躍動しているのを感じずにはおれない。そしてその土台には、豊かな国語力を基礎とした、文化の伝統と教養の存在が偲しのばれる。

もちろん、現在でも若い知性が活発に伸びようとし、意欲溢れる頼もしい若い人を発見して、胸を撫で下ろすこともよくある。しかしやたらに目にするのは、例えば電車の中で、身辺雑多のたわいもない話題に終始している雑談の学生、さらに目にしたくないのは、動きののろい老人を悪しざまに、のしつてゆく横断歩道の若者、身障者をみて、お気の毒にの情を覚えるどころか、蔑みあざける生徒、些細な理由で暴力をふるう男、またニュースで目にかかる、わが子を感情の暴発するままに虐待し、殺す若い親、はたまた

暴力と人権蹂躪の巢と化した学園、さらにはある民放が街頭で収録していたが、マイクを差し出して、アメリカの初代大統領は誰ですかと聞くと、リンカーンだったかなあ、いやレーガンじゃなかったかなあなどと自信無さそうに首を傾げたり、フランスの位置は？ と世界地図を示されて、恥ずかしげもなくトルコあたりを指す短大生や大学生にお目にかかるなど、目にしたくもなく、聞きたくもない、呆れたことが多過ぎる。

若い人ばかりではない。テレビなどでも、NHKも民放も区別なく、食物を試食して、“おいしい！”などと宣^{のたま}う番組がやたらと目につく始末だ。料理の発達や洗練は結構には違いないが、これも芸の無さと番組製作者の想像力の貧困と知的関心の狭さが、否応なく透けて見えてくるようで、有難いものではない。テレビで有難くないものの、序でに言えば、その社会にとって主要な役割であるべきニュース番組では、後でも触れるが、果てしもなく報

ぜられるのが、警視庁特捜部の活躍であり、政・官・財の汚職背徳事件である。国運を左右する情報、人々の生活に関わるニュース、世界の動向の重要ニュースを押しつけて。

他の先進国では先ず見られない光景がある。

電車の中で、立っている老人の前で股を拡げて、だらしく足を伸ばして腰かけている高校生などもそうだが、自分の横の席が空いているのに、そこへ片手を置いたり、ハンドバッグをさりげなく突出して、他の客が坐るのを邪魔しようという魂胆らしい輩やかである。自分もコミュニティの一員であり、他の人にも坐らせてあげようという人間らしい情が、なぜ浮かばないのだろう。エゴ丸出しの醜い心に恐れ入る。ぎゅうぎゅう詰めの満員電車の席を詰め合つて、ニッコリ笑っていた、あの敗戦の仲間意識に溢れていた頃の日本人が懐なつかしく想い出される。

あの澄んだ、きれいな瞳ひとみをした若者たちの七十年前の国から、この日本が大きく変ってしまったのは間違いない事実である。もちろん、日本人の天性、その良い性格が根本的に変ったとは思わない。そしてまた、この七十年間の大きな変貌なまには、いろんな要因が重なってはいらるだろう。しかしこのままでは、やはり情けないのではないか。この辺で、この原因の主なものは何なのかと、立ち止って考えてみる必要があるのではないのだろうか。

さらに一つの社会共同体をわれわれが生きてゆく上で、必要な良識とか教養、あるいは先人から手渡されたはずの文化的伝統といったものを支える心を取り戻すには、さらにまた、一国の未来を切り開き、国運を左右することになる若々しい知的活力を養ってゆくには何が必要なのだろうか、何が欠けているのだろうか、といった問題を、考えてみなければならぬ時期に至っているのではないだろうか。こういったことどもを念頭に置きながら、話を

進めてみたいと思う。

「もののあはれ」は遠くになりにつけり

いま仮りに、一国の知的活力が失われたり、知的レベルが低下し、幼稚化が起った場合、一体、どういうことが起り、どういう社会が現われてくるのか、つまりわれわれがどういう社会の中で日々を過さねばならなくなるのだろうか。例をあげたくはないが、世界のある地域の国々で起っている現実を注意深く、詳しく観察し、また想像力を働かせることにしてみよう。そこでは政治・経済・社会のあらゆる面で、日常生活のいたるところで、幸福とはほど遠い困難な営み、悲惨な日々の現実に出会わねばならないだろう。これは決して他人ごとではない。仮りにそこまではいかにしても、次の世代、あるいはさらにその後の世代で、日本がそういった状況に近づいてゆく

ことはないという保証は何もないのだ。そのためには、いまある眼前の社会の諸現象の中に、そのほんの微かな萌芽、その予兆を、注意深く読みとり、疑念を投げかけ、原因を探り、危機意識を抱いて、熟慮し、真剣な対策が立てられ、大胆に実行に移されねばならないのではないのだろうか。

昔、深い炭坑の底へ入ってゆく時には、籠かごにカナリアを入れて、持って降ったものだ。カナリアが羽根をバタつかせて酸欠の危険を知らせてくれるからだ。しかしカナリアの異常を敏感に感じとらねばならないのは、われわれ人間である。小鳥の警告によって、対策を誤ってはならないのは、われわれである。

世の中の優れた詩人の中には、この警告や予示の役目を果してくれる人がある。常人のわれわれより遥かに鋭敏な感知力のアンテナを世の大气にかざしているのだろうか。

ご承知のように、第一次世界大戦は、ヨーロッパに史上初めて全面的な大打撃を与え、荒廃というものを現実のものにした。二十世紀最大の詩人の一人といわれたT・S・エリオットは長篇詩『荒地』を書いて、大戦後のヨーロッパの文明の荒廃を象徴的に形象化した。

後年イギリスの論壇の大物になる、ある若い詩人がエリオットに会って間もない頃、「西欧文明の未来をどう思いますか」と尋ねたとき、大詩人の答えは「未来はない。行きつく先は相互殺戮の闘争でしょう」だった。「相互殺戮の闘争」とは一体、どういうことを指しているのですか？」と重ねてたどしたところ、エリオットの答えは「それは日常的に、まちなか街上で殺し合うようになることです。」だった。これは具体的な街中の路上の光景を述べたというよりは、次第に殺伐さつぱつになってゆくであろう世界の未来に対する、詩人の鋭敏な直観を、象徴的に表わした言葉だったろう。だがしかし、ヨーロッパ、

いや世界はその後、大戦前の人間臭い時代から、確実にドライで殺伐な世へと移っていった。

また二十世紀英語圏最大の詩人といわれるW・B・イエイツは、キリスト降臨の二千年期に替って、次のミレニアムに「再臨」するものとして、救世主とは凡そかけ離れた、いわば知性と獣性の合体した、スフィンクスめいた人面獣身の怪物を象徴詩で描き、「われわれの（時代の）あとに来るのは野蛮神」だと言った。つまり知性と徳性とか仁性の結合ではなく、知性と獣性が結合する時代が来るだろうという不気味な予言だったのだ。

二十一世紀に入った現在、エリオットの言葉やイエイツの予言的イメージは、もはや詩的象徴のヴィジョンの表白ではなくなってしまった。銃器乱射、毒薬散布、無差別殺戮や爆弾テロの惨劇等々、市民生活の安心や平穏が保たれ難い世の中になってきたようだ。かつての大詩人たちの予言が、ついに、

日常の現実のものとなったのである。

時代の潮流の中に生きざるを得ないわれわれ人間には、その流れに抗すべき手立てはないとも言われる。しかしこうしたすべては人間が引き起し、人間がやることである。このように人間が主体者であり、人間が作り出してゆくことならば、それらすべては、結局、その心から発しているのだ。この観点に立てば、その解決策もまた、われわれが工夫できると考えてよいのではないだろうか。

殊にいまは、日本の場合に限って考えているところである。始めに触れたように、いま人々が一般に口ずさむような歌詞一つとってみても、それが新しい流行なのだ、それがいまの、殊に若い人の感性、フィーリングにマッチしているのだという主張もあるのだろうか、やはり次第に幼稚化してきている。洗練された文化の積蓄を背後に感じとれるようなレヴェルから離れてき

たのではないかと判断せざるを得ないものがある。

こうした近年の状況を考えると、控え目にみるとしても、欧米の日本文化の研究者たちが、口を揃えて感嘆し、羨ましがるどころの千数百年という長く、豊かに成熟した日本文化の、世界に誇るべき、洗練された伝統から、明らかに断絶したと言わざるを得ない様相が見てとれる。しかもその断絶は、かなり重症のものである。

一例をあげるとすれば、もちろんこれは、日本人の心、日本文化のさまざまな面の中の一様相であり、すべてではないが、「もののあはれ」の精神文化の系譜がある。諸行無常の乱世の世を捨て、人生の深い無常観から、自然の中に参入し、「もののあはれ」の世界に入っていった和歌の西行、この無常の世の一切の執着を離れて、風月を友とし、和歌管絃に没入し、遂にはすべてを捨て切って、方丈の庵いおりに数奇すきの道に生きた鴨長明、血なまぐさく、す

さびゆく浮世の無常感から遁世^{とんせい}して、「すさび」から「つれづれ」へと身をおいて、その無常末世の具体相を冷静に観察した批評家、吉田兼好、変転の乱世にありながら、そういう捨て切る「すさび」の不毛性を越えて、形ある技能、芸事を選び、その道に身を捧げ、これを洗練させる体験の技を練り、「さび」の世界を作り出していった世阿弥元清、いつてみれば、自然の花を超えて、真の花を仕上げてゆくという高度な様式美の世界を創造した世阿弥の「幽玄」の演能の完成、その彼の型の美の世界から少し時をおくことになるが、その洗練された美の世界は、やがて、造化の妙を敏感に感じ取り、風月を友とし、旅を重ね、旅を栖^{すま}とする漂泊の思い止まぬ詩人として、風雅の「さび」の世界に没入してゆく松尾芭蕉の俳諧の道へと受け継がれてゆく。

しにもせぬ旅寝^{たびね}の果てよ秋の暮

例えば、このようにして日本人の心が、美しい自然に包まれ、洗練され、繊細な感受性を発達させ、研ぎ澄まされ、深められてゆく独自の心の世界、魂の境地に到達して、作り上げられていった一種の悟りの境地、美の心の文化的伝統の系譜の生命は、今一体、どのように息づき続け、また伝えられているのであろうか。

言い換えれば、春夏秋冬と微妙に移ろいゆくところの、世界にも稀な美しい自然（それはここ三・四十年であらかた破壊されてしまったが）の中に包まれて暮らし、何世紀にも亘^{わた}って育^{はぐ}まれてきた日本人の心の優しさ、感受性の細やかさが、仏教思想と出会い、それを受け入れて醸成されてきたとも言える「もののあはれ」の精神文化の伝統の系譜……。これは言うまでもなく、中国文明やイスラム文明などには全くないもので、西洋文明にも見られない、

独自の高度に洗練された精神世界であるが、もちろんそれが、日本人の心の世界、日本文化のすべてではなく、一側面であるにしても、この誇るべき系譜は今、どのように伝えられ、われわれ日本人の心に生き続けているのだろうか。

こう考えてくると、やはりどうしてもこうした伝統の断絶の発端はつたんは、第二次大戦の惨敗と、勝者による占領支配という、日本史上かつて経験したことのない悲劇と、その結果に由来するいくつかの不幸な政治的、社会的要因に求めざるを得ないであろう。いまそれを、いちいち指摘し、詳しく分析する余裕はないが、それらのヴェクトルによってと言うか、力学によって流されざるを得なかった面があったとも見られるだろう。そしてその方向で流されてきた、この七十余年の教育行政の在り方の、つけがいま来ているのではないかと考えざるを得ない。

先進諸国に逆行する異常な教育

花を浮かべて 流れる水の

明日のゆくえは あす 知らねども

今宵うつした こよい 二人の姿

消えてくれるな いつまでも

これは何でもない戦前の庶民の歌と言われるものだが、やはりその背後にみえる心は幼稚ではない。大人の人生観がみてとれて、口ずさむに抵抗感はない。やり切れないような直接的な、単純な、投げ出されたような言葉の片々ではない。

教育の在り方と言え、先ず平等を唱えとな（法の前の平等ならもちろんのことだが）、ひたすら画一化、平準化を計るべきだとして、安易にも底辺に合わせる、いわば護送船団方式の安全運転というか、事なかれ運転をよしとして、過去を知り、先人の業績を知る努力もせず、国の未来への目配りをも欠き、いまを疑うことも忘れ、深い思慮を欠いてきたという現実があるのではないか。

人生の十代という知力の伸びの最も遅たぐましく盛んな時期、この時期を逸してはならない年齢の人々の教育はいかに在るべきかを真剣に、深く考えてこなかったのではないか。新しい海綿が水を吸うように知識を吸収できて、しかも一生忘れることのない柔軟い脳細胞をもったこの発達成長期に、よく言われるように、熱いうちの鉄のように「鍛える」という最も大切な作業を避けて、ひたすら横一列にとか、差をつけるのは民主主義に反するなど唱えて

(一般的に言つて、生物社会では進化の段階の高いほど個体差が大きくなると言つても誤りではない。いまそれはさておくとして、人間においてはさまざまな面で身体的、内面的差や特色があり、それは法の前の平等とは全く別の事柄なのだが)、未来へ向つての知力と体力の発達にとつて大切な、個人個人の、それぞれの好奇心の充足、競争意欲への刺激と忍耐力の育成、そして学んだものを確実に身につけるための修練と、その成果の厳密な評価といった事項を、すべて悪と見做してきた半世紀にわたる、他国に例を見ない異常な教育面の傾向と行政のつけを、いまこの国の社会が蒙りつつあるのではないのだろうか。

ただ国内だけに目を向けて、互いに慰め合つていて事が済むならそれでもいいだろう。しかしわれわれが生き抜いてゆかねばならぬ世界はそう甘くはない。新しい事態、未経験の問題の出来に直面して、これに立ち向い、策を

練り、それを乗り越え、切り開いてゆく力を失った国民は、世界という活動の舞台から降り、あるいは降され、脱落し、衰亡への道を辿るより外ないのだ。

こういった点を、真剣に考えなかった結果、この国の社会はどうやら取り返しのつかない状態に陥る時点に来てしまったのではないか。

現在、そしてまた来たるべき時代の国際競争の荒波の中を生き抜かねばならないのは、いずれの国にも言えることであり、そのためには教育の再編成と充実による知的活力の向上が不可欠だとして、主要各国は大胆に国民の学力向上に取り組んでいる。それが最近の状況である。

成長期の若者たちが、向上の意欲に燃えて、未来にそれぞれ希望を抱き、人生を明るく捉えて、伸びている国がある。講義を受ける大学生たちが、眼を光らせている国があるとは、海外の大学を視察したり、講壇に立つて帰国

した人たちが、しばしば指摘している通りである。

こうして若い人々、次の世代が力を伸ばしている国々の間に伍して、国際場裡で生き抜き、太刀打ちしてゆかねばならぬこの国が、ひとり「ゆとりの教育」などと称して、小・中・高の教育の各段階のレベルを次々下げ、基礎教育の基盤を粗雑化し、質量ともに呆れるような削減を計り、逆行を重ねている現状のままですべていいのだろうか。

あとがき

一国の国語教育が、基礎段階から、しっかりと充実しているかどうかで、その国の未来が大体、予測できるのではないかと、かねてから考えている。

例えばそれが、その国の興亡そのものの予見ではないとしても、人々の未来の生活が、全体として幸せなものになるかどうか、について凡その推測ができるのではないかと考えても、大きな間違いはないのではないだろうか。政治・経済とか科学技術の水準とか、一国の未来にはさまざまな面が関わってくるが、結局、その幸せな未来の要件ということになると、根本になるのは、

その国の人々の内面世界の充実、その質、品位といったことに集約されるだろう。そしてその心の世界を支える生活環境を決定し、基盤となる自然環境が、それを支え守る要素になってくるだろう。こう考えると、人々の内面世界を育む教育と、それを守る自然環境の二つが、われわれの生きる社会にとって、最も大切な二元ということになる。

そしてわれわれの生きる社会の良好な質の維持のためには、この二元の健全やかな存続が決定的に重要であり、両者は互いに深く関わり合い、絡み合っていることから、一方が腐敗したり、破壊されたりすれば、他方もまた健全であり得ないということは、世界のある地方の状況を注意深く観察すれば、充分納得して戴けるのではないかと思う。

こうした観点から、一国の人々の内面世界の充実に深く関わる国語教育の問題と、成長期の世代に現われる現象の変化を意識したことより出発したこ

の論考の中核部は、実はもう六年ばかり前に書きあげたものである。だが発表の場を与えてくれる雑誌などを、あれこれ当つてみたが、果せずにきようてい篋底にあつたものである。

一般的に、雑誌編集者にとっては、読者に新鮮な衝撃を与えるような読物とか、目新しい興味をそそるような点のない文などは採用できないという事情があるのは当然のことかも知れない。読者獲得が至上命令である競争社会では、それも無理もない話だ。この拙稿などは読者に鮮度のいいショックを与えるなど、とてもできない代物だが、それはそれでまた存在価値がないとは申せないのではないだろうか。

読まれる方々が、例えば、心の中で静かに、深い、あるいは重い思いを巡らされるような、あるいは、さらにこの国の現状に危機意識を抱かれるような切っ掛けに、もしこれがなるならば、そして国語教育の充実、国語力のレ

ヴェルアップが、現在日本の最重要課題の一つであり、しかも急務なのだという認識がもし得られるならば、筆者の務めが果せたのではないかと思っている。

そんな次第で、最近、教育問題とか、心の教育ということが、人々の関心を強く惹くようになっていく状況のことも考え合わせて、久し振りに篋底から引っぱり出してきて、加筆訂正した上で、一応の完稿としたものが本稿である。

国語教育の変遷ということについて考える場合、やはり一九四〇年代の国家総力戦という名のもとで、将来の社会の中核となるべき中等学校生徒や高等学校・専門学校の学生たちを、勤労動員に駆り立て、大学の文系の学生を戦場に送り出して教育を中断したことが、国家社会に与えた痛手は計り知れないものがある。戦後その世代が教育の任に当る時代になったり、また全く

系統の異なる印欧語の正字法の考えを、日本語に当てはめて漢字やその音訓を制限したりしたことの影響も小さいものではない。

しかし戦前の初等教育について考えても、あのロナルド・キーンさんも日本語学習の手始めに使ったという「サイタ、サイタ、サクラガサイタ。」の国定教科書より前の「ハナ、ハト、マメ」の教科書で教育を受けた世代の国語力の方が「サイタ」世代より一段と優れていたことは、文章力のいろんな証拠から間違いないと思われる。そうみると、人々の国語力、それは内面世界の広さと深さに関わってくるわけだが、さらにまたそれは人物の器や個性やスケールの問題にも繫^{つな}がっているわけだが、その国語力の、少なくとも重要な部分というか、面では、ひよつとすると明治以来、ずっと低下してきたのかも知れない。つまり、この国の人間が小粒になってきたのかも知れない。

このような点など、まだ考えねばならぬ問題もあるが、ひと先ず擱筆とし

たい。

なお本書の四・五・六章は平成十三年に『国語教育が国を滅ぼす』として、あぼろん社から出したものを同社社長伊藤武夫氏のご好意により再録させて戴いたものである。

最後に通例は巻頭に記すものだが、人生の大事な岐路の選択を助けてくれた無二の友坪内啓太郎医師と、比島攻防戦で散華し、今はミンドロ島沖に眠るかけがえのない兄、海軍中佐辻誠夫にこれを捧げたい。

本電子本の出版に当たり、小方の希望をすべて快くお聞き届け戴き、種々ご配慮下さり、お世話になったせせらぎ出版の山崎亮一氏に心から厚く御礼申し上げる。

淀の河畔にて

平成二十九年一月

辻 昭三

辻 昭三 (つじ しょうぞう)

1927年生まれ。京都大学文学部英文卒業、京都大学大学院英文修了、元神戸商船大学（現神戸大学）教授、元京都大学講師。専門は英・アイルランド文学。現在、国際アイルランド文学研究会員、京大大学院英文OBのアシニウム英詩研究談話会座長を務める。

著書・論説

- 『イエイツの世界』（共著 山口書店）
- 『悲劇の群像とわが栄光』（研究社）
- 『没落と終焉に立ち向かうイエイツ』（研究社）
- 『イエイツ・最終詩考』（『記念論文集』）
- 『国語教育が国を滅ぼす』（あぼろん社）
- 『失格の国語教育』（扶桑社）
- 『イエイツの詩界逍遙』（英宝社）etc.

表紙画像：『百人一首抄』経厚講〔室町時代末期〕写
（国立国会図書館デジタルコレクション）

〈電子本〉国語の花咲く国へ

2017年1月25日 発行

著 者 辻昭三

発行者 山崎亮一

発行所 セセラギ出版

〒530-0043 大阪市北区天満 2-1-19 高島ビル 2 階

TEL. 06-6357-6916 FAX. 06-6357-9279

郵便振替 00950-7-319527

© 2017 Shouzou Tsuji

セセラギ出版ホームページ <http://www.seseragi-s.com>

メール info@seseragi-s.com